

「少女小説」とはなにか

渡部 周子
(総合文化学科)

What is the Girls' Novel?

Shuko WATANABE

キーワード：少女小説 ジェンダー Girls' Novel, Gender

序

近年に至るまで、「少女小説」は研究対象とされることが少なく、その状況を『少女小説事典』(二〇一五年)^①は次のように説明している。

少女小説は長い間、文学の低位ジャンルとして扱われ、本格的な研究や評価もほとんどなされなかった。男性／女性／少年／少女という階層構造のもとで、周縁文化として〈不可視〉の扱いをされてきたのである。近年ようやく、フェミニズム理論やジェンダー・スタディーズに対応した研究が進められてきている^①

また、同事典の項目「評論」において、千野帽子は、「一九九〇年以降、少女小説論は児童文学や近代文学の枠組自体を問う方向に発展した。「文学」一般の論じかたの偏りや硬直を、少女文化を視野に入れることによって補正する方向に進んだ、と考えていいだろう」と述べる。^②

このように、「少女小説」は研究の対象となり、その歴史を通観し

ようとする試みもなされるようになる。本稿は、批評的言説を辿ることで、「少女小説」とはどのような存在か考察する。^③

一、先行研究と問題の所在

一一一、「少女小説」とは何を指すのか

この節では、「少女小説」をめぐる近年の研究動向を、ここ十数年の間で発行された単行書を対象として、確認したい。

菅聡子が編者である『少女小説』ワンダーランド^④(二〇〇八年)は、明治から平成までの長期間に渡る「少女小説」の動向を捉え、文学批評の対象とした先駆的な試みである。ここでは「少女小説」を、「ゆるやかに考えて、少女を読者として想定して書かれた作品」と捉えている。^④

『少女小説事典』(二〇一五年)は、「少女小説とは、主として十代の少女読者を対象とする、児童文学よりもやや大衆的な小説を指している」と定義する。^⑤つまり読者が誰かが、ジャンル規定をするという見方をしている。

また、大橋崇行による『ライトノベルから見た少女／少年小説史』

(二〇一四年)は、「ライトノベルを起点として〈少女小説〉〈少年小説〉に立ち戻り、その上で小説、まんが、アニメーションをはじめとした日本の物語文化を見渡すと、これまでとはまったく異なる日本文化の風景が見えてくる」と述べる。⁶⁾ すなわち、「まんが・アニメ文化」の礎を「少女小説」〈少年小説〉と見るのである。大橋は、「少女小説」を「欧米などには見られない日本独特の小説ジャンルであり、一般的には明治期から昭和期にかけて書かれたものを総称」するものだとす⁸⁾。また、「児童文学」が大人向けに書かれた〈文学〉の価値観を児童期の読者にそのまま持ち込もうとした⁹⁾のに対し、「少女小説」〈少年小説〉は児童期から青年期にかけての読者を想定して書かれたエンタテインメント小説⁹⁾だとする。

だが、そもそも、何が「文学」で何が「大衆的」とされ、また「エンタテインメント小説」とされるのか、これ自体が単純には捉え難い問題である。たとえば、川端康成は少女雑誌で「少女小説」を記しているが、これを大衆小説と捉える研究者は少ないだろう。しかし、川端康成の筆名による『乙女の港』¹⁰⁾を、「少女小説」とする見方に異論を唱える者も少ないだろう。

これらと一線を画し、目黒強は、『児童文学』の成立と課外読み物の時代¹¹⁾(二〇一九年)で、「課外読み物」という枠組みを提起する。明治期における公教育の普及は、本や雑誌を読むことができ、雑誌に投稿できる読者を育てたという点で、〈児童文学〉の誕生を促した¹²⁾。「課外読み物」とは、「学校で指定された教科書や参考書以外の読み物」を指し、「児童・生徒に適しているという価値判断を内在させている」¹³⁾。その成立要件は正課活動としての「公教育の普及」と、対象としての「児童文学」の成立¹³⁾だと説明する。目黒強は、「少女小説」も課外読み物だと捉えている。

一 二、「少女小説」という名称

続けてこの節では、ジャンルの草創期である近代日本において、「少女小説」とはどのような読み物を指したのか、主にここ十数年の先行

研究の知見を確認する。

久米依子は、日本で最初に「少女小説」という名称が使われたのは、少年雑誌『少年世界』(博文館)で田中夕月「水の行方」(一八九七(明治三〇)年一二月)の冠辞としてだと述べる。これは、「少女教訓談」「少女お伽話」「少女談」等と使い分けられており、「少女小説」は「写实的で小説的結構」をもった物語に使用されたと指摘する¹⁴⁾。

また、高橋重美は、一九一六(大正五)年の少女雑誌『少女画報』で「少女小説」という肩書きがあるのは、今日では「少女小説」の代名詞と見なされている吉屋信子の『花物語』ではなく、和田古江の「親ごころ」、尾島菊子の「うきくさ」、田村俊子の「私の人形」「河原撫子」等だと述べる。そして、「少女小説」と称される作品群が有する特徴を、「物語性の度合いにあると思う。ここで言う物語とは虚構テクストに不可欠な出来事の流れ、「何／誰がーどうした」の連鎖的な記述としての筋を指す」と指摘する¹⁵⁾。

目黒強は、創刊一九〇六(明治三九)年から一九一二(大正元)年の『少女世界』で「少女小説」と角書きがある作品を調査し、総数が一〇三作品あることを明らかにしている。「少女小説」という名称は、主な書き手である沼田笠峰が「少女の柔らかな心に、善い感化を与へるという目的」から見て「小説よりは学校小話」という方が適当だが、「従来の耳慣れた言葉」であるから用いたと述べていることを指摘する¹⁶⁾。また、一―で述べた通り、沼田笠峰の「少女小説」を目黒は課外読み物と捉える。

二、「少女小説」というジャンル名称と発表媒体としての少女雑誌はじめに

一―二で確認した通り、先行研究が注目したのは、角書きの有無であり、これにより「少女小説」とカテゴリー化される作品の特徴を捉えている。

ここで、同時代の批評の場における作家と編集者の発言から、「少女小説」と見なされるのはどのような作品だったのか、その包括され

る範囲についてさらなる検討を加えたい。

二一、「少女小説」というジャンル名称

戦前の批評の場では、「少年少女小説」を「児童文学」に包括すると見なす場合と、別個のものに見なす場合がある。また、「少年文学」や「少年小説」に包括して、論じられることも多い。呼称については、「少年少女小説」、「少年少女文学」、「少女文学」と呼ぶ場合もある。とりわけ、「少女小説」と「少女文学」は、類似的言葉、言い換え可能な言葉として、用いられている。

作家尾島菊子は「不自然を避けること」（一九一六（大正五）年）と題し、「私などは随分前から少女小説と銘打たものを書いて参りました」と述べ、また自身が目指すのは「現実的に自然にと心がけて子供の世界を描くと云ふところに少年文学の行くべき道がある」と述べている⁽¹⁹⁾。尾島は「少女小説」は「少年文学」に包括されるものと捉えていることがうかがえる。また、『少年倶楽部』の主幹張尾穂草は、「新しい少年少女文学―所謂少年少女小説と云ふもの及作家」（一九一六（大正五）年）と題し、現在の作品と作家が抱える問題、並びに今後の期待を次のように語っている。

単調なお伽噺に満足しきれない少年少女が、徹頭徹尾感情に訴へる此種の読物を歓迎するのは事実であるとしても、徒らなる、自覚なき作家が、相手を侮つた所謂「楽なもの」としての作物が如何に薄つべらであり、且つ如何に価値のなき。

斯う云ふ人々が、今少し研究し、今少し真剣な態度に出づる時初めて真の新しい少年少女文学は生まれるであらう。

何れとしても今日は、此種文学に就て大に考ふべき時である。

新しい時代の少年少女は、やつぱり木刀を振りかざしてヤアトオと云つた丁髷の英雄豪傑よりも、新しい少年小説とか少女小説を好み、新しい科学を応用した冒険談、探偵談を好む⁽²⁰⁾。

まず、その表題から、「少年少女文学」を「少年少女小説」と等価に見なしていることは明らかである。加えて、論説中で、「新しい少年少女文学は生まれる」であろうとし、「新しい時代の少年少女」は「新しい少年小説とか少女小説」を好むとも記している。

また、より後年である昭和十年代に、作家北川千代は、「少女小説の構成と技術」（一九三四（昭和九）年）に、次のように述べている。

少女文学が愛情の文学であると云ふのはこの点で、作者は母のいたりを以て少女の心を理解し、慈しむと同時に、少女の立場からの抗義や疑問の、代弁者ともならなければならないのです。その点から云つて、私は、少女小説の作家は、社会運動の一端をうけ持つてゐるものだと考えてゐます⁽²¹⁾。

これらの論者は「少女文学」と「少女小説」を概ね同義的に捉えている。ただし、この節と、続く二一で取り上げる資料に限つてのことではあるが、「少年少女文学」や「少女文学」がより包括的であり、その中に「少女小説」が含まれるようだ⁽²²⁾。

二二、発表媒体としての少女雑誌とジャンルの多様化

一九一六（大正五）年に、博文館の雑誌『中学世界』の主幹竹貫直人、『少女の友』の主幹星野水裏、作家尾島菊子は、「少女小説」とその発表媒体に関して、次の見解を述べている⁽²³⁾。

竹貫直人は、「児童芸術に就て」（一九一六（大正五）年）と題し、「いつになつたら、真実の意味に於ての少年文学の芽が吹くだらうか、それを考へると私は心細くてならぬ。少年少女の雑誌は夥しくある。月々数多くの作物は発表される」と記しており、「少年文学」の発表媒体として「少年少女の雑誌」を挙げている⁽²⁴⁾。

また、星野水裏は、「真面目な読者は少い」と題し、少女雑誌の編集者は、「どうしても一般の読者を頭に置いてからやらなければならない」ために、「文学的な読み物など云つて理想的にのみ」にはで

きないと述べる。⁽²⁴⁾

また、作家尾島菊子は、編集者の側からの注文で、自身の思うように書くことができないうとして、次のように語っている。

私などは随分前から少女小説と銘打たものを書いて参りました。私の目がけてゐるのは勿論芸術的なものでありますが、近頃皆さんがお書きになるものは、非常な変化の多い筋のあるものが多いやうです。雑誌編集者の方からもさう云ふものが読者の受けが好いので、自然注文などが出て参りまして私なども自分の思ふやうなものが書けないと云ふ憾みもございます。⁽²⁵⁾

尾島は、芸術的なものが書けないのは編集者の依頼に従った結果すなわち雑誌の側の問題であり作家の問題ではないと主張した。「少女小説」の質を決定するものとして、掲載誌の意向が大きいと書き手は意識していたのである。

もちろん、少女雑誌に掲載された作品と一括りにいっても、様々な差異とカテゴリー付けが生じる。また、時期によっても変化して行く。特に、昭和戦前期に至ると、内容も多様化しており、それ以前の時代とは質量ともに充実して行く。

『文藝年鑑』に「少年少女文学」「童話」「童謡」の三種が、新しい項目として加わったのは、「昭和五年版」であり、一九二八(昭和三年十一月—一九二九(昭和四年)年十月の動向をまとめている。ここでは、「少年少女文学概観」と題し、次のように説明している。

少年ものとしては「少年倶楽部」「少年世界」「譚海」「日本少年」等、少女ものとしては「少女画報」「少女倶楽部」「少女世界」「少女之友」等が現今に於いては先づ代表的な雑誌で、斯界不況の声を聞くこと久しいにも拘らず何れも相当の地盤、読者を維持して成績の見るべきものがあるのは年少者のために悦ぶべきことであらう。⁽²⁶⁾

このように、『文藝年鑑』は、「少女文学」の発表媒体として、『少女画報』『少女倶楽部』『少女世界』『少女の友』等の少女雑誌をあげている。また、「少年少女文学」の書き手として、次の作家をあげている。

本年度に於いてこの方面で比較的多くの作品を発表した作家を挙げるならば、大佛次郎、野村胡堂、野村愛正、佐藤紅緑、国枝史郎、吉川英治、大倉桃郎、高垣眸、加宮貴一、下村千秋、吉田絃二郎。北村壽夫、白石實三、行友李風、伊藤永之介、橋爪健、武野藤介、高桑義生、福田正夫、吉屋信子、三宅やす子、額田六福、畑耕一、浅原六朗、塚原健二郎、直木三十五、本地正輝、水谷まさる、大木篤夫、長谷川浩三、斉藤龍太郎、北川千代、小島政二郎、加藤武雄、新井紀一、伊福部隆輝、佐藤八郎、安藤盛、広瀬操吉(以上順序不同)等はその主なるものであらう。⁽²⁷⁾

実に、多様な作家の名が挙がっている。「少年少女文学」の多様な広がりが見取れる。

その翌年の昭和六年版の『文藝年鑑』における「少年少女文学概観」は、一九二九(昭和四年)年十一月—一九三〇(昭和五年)年九月の動向を、次のように語っている。

少年少女文学とは、少年雑誌少女雑誌等に掲げられた読もの一切のことであるが、本年度のこの方面を通観するに、相変らず各雑誌とも競争的に、それぞれ「長編もの」を連載して之を一種の呼びものとしてゐる観がある。而してそれらの長篇は勿論、各読ものを大別して、小説、大衆もの、滑稽もの(ユーモアもの)、探偵もの、物語ものなどに分けて考へて見ることが出来る。⁽²⁸⁾

「少年少女文学」と一口に言っても、「小説、大衆もの、滑稽もの(ユーモアもの)、探偵もの、物語もの」等に、分けることが出来ること

考えていたのである。続けて、「少年少女文学一覧」で、その区分について次のように述べる。

(1) 少年小説、少女小説少年少女読物の他に大衆文芸、探偵小説の銘あるものでも、少年少女雑誌に書かれてあるものは、すべてこゝに収めた。詩、童話、童謡はそれぞれ別項にある。

(2) 「少女画報」「少女倶楽部」「少女世界」「少女の友」「少年倶楽部」「少年世界」「日本少年」等は全部取扱はれてゐるから、この方面は大体に於いて全部網羅されてゐると云つていいであらう。

少年少女雑誌の中にも、「少年少女小説」と異なる読み物があるが見るが、しかしそれらを全て包括して「少年少女文学」として括るのだという。「少年少女文学」がより包括的な位置づけとなっている。

昭和五年版では、作家の紹介も一括りであったが、昭和六年版は次のように作家の紹介をしている。

「大衆ものが特に目立って少年少女読もの界に入ってきたのは、ここ三、四年來の傾向」であるとし、その書き手として「野村胡堂、大佛次郎、吉川英治、行友季風、平山蘆江、安藤盛、などが主として仕事をした人々である。次に滑稽ものでは、佐々木邦、寺尾幸夫、サトウハチロー等があり、探偵ものでは大下宇陀児、甲賀三郎等」を挙げている。

また、「一般少年小説、少女小説で相当まとまった仕事をした人々には、吉屋信子、佐藤紅緑、菊池幽芳、吉田絃二郎、加藤武雄、野村愛正、小島政二郎、高垣眸、畑耕一、三宅やす子、菅原寛、三上於菟吉、山中峰太郎、塚原健二郎、福田正夫、水谷まさる等」があると述べる。

興味深いのは、「一般少年小説、少女小説」として「一般」という言葉を入れていることである。「一般」すなわち「スタンダード」と

しての「少年小説、少女小説」とそうでないものを区分するにあたって、『文藝年鑑』が用いたのは、作家によって判断するという方法だった。

なお、『文藝年鑑』は、大衆ものが目立って入ってきたのは「ここ三、四年來の傾向」だという。ただし、既に見た通り、張尾穂草は、一九一六(大正五)年に、「新しい時代の少年少女は、やっぱり例の木刀を振りかざしてヤアトオと云つた丁髷の英雄豪傑よりも、新しい少年小説とか少女小説を好み、新しい科学を応用した冒険談、探偵談を好む」と記している。大正五(一九一六)年にすでに、「冒険談」「探偵談」は人気を得ていたと見ることが出来るだろう。

三、編集者による少女雑誌観―沼田笠峰と『少女世界』

少女雑誌に掲載された作品が「少女文学」だとする見方が、当時の出版人にとっては一般性のあるものであることが確認できた。

ここで、沼田笠峰の少女雑誌観を確認したい。『少女世界』は、明治末において、最もよく読まれた少女雑誌だといわれている。一九〇六(明治三九年)創刊、一九三一(昭和六年)終刊、主筆は発刊当初は巖谷小波の監督のもとで海賀彦哲が、二巻からは沼田笠峰が務めている。

「少女小説」の掲載元である、雑誌というメディアの特徴について、『少女世界』の編集者沼田笠峰は、「反物と小巾類」と題し、次のように述べている。

私は、諸嬢が学校でお読みになる教科書は、尺のある反物で、課外の読みものとしての雑誌は、小巾類のやうなものではあるまいかと思ひます。

雑誌は綺麗です、而して役に立つ記事も沢山あります。その中には、歴史談もあり、理科談もあり、修身談もあり、旅行記もあるといふ有様で、ちやうど色々まゝに美しい小巾類を集めたやうな眺めです。而もその記事を読みますと、知識を広め、思想を

高尚にし、趣味を清新にするといふ利益があります。(中略)

雑誌の記事は切れ々です。地理や歴史のお話があつても、その中の一部分、一事蹟が記されてあるだけで、全体に渉るやうなことは、減多にありません。それ故に、雑誌ばかりを読んで居りますと、どうも知識が切れ々になり易いのです。まとまった学問をしようと思ふには、やはり秩序正しい教科書に倚らねばなりません。⁽³⁵⁾

沼田笠峰は「雑誌は、小布類」と喩えており、これは「知識が切れ々」であることからであり、「まとまった学問をしようと思ふには、やはり秩序正しい教科書に倚らねばなりません」と述べている。学校教育の基本線に沿いながら、学校から解放された場面での幼少年教育を標榜した『少年園』や『少国民』は、一八九五(明治二八)年に発行停止を命じられ消えており、政治批判をすることで、厳しい弾圧をうけることは避けねばならなかった。このため、当時の雑誌編集者には、学校教育の精神に背馳しない姿勢が定着しており、沼田笠峰も同様であつたと察せられると続橋は述べる。⁽³⁶⁾なお、沼田笠峰の「少女小説」を課外読み物と、目黒強は見なしており、これは一―一、一―二で指摘した通りである。⁽³⁷⁾

「教科書」こそが正当だとしても、雑誌にも存在意義があると、沼田笠峰は考えていた。すなわち、「娯しみにもなり、利益にもなる」こと、その上で「知識を広め、思想を高尚にし、趣味を清新にするといふ利益」があるとす。それゆえ「教科書を読む傍らには、雑誌を読んで、高雅な趣味を養はなければなりません」と明言している。⁽³⁸⁾

なお、沼田笠峰は、一九二二(大正一〇)年に博文館を退社し、頌栄高等女学校の校長として招かれ、以降は教育界で活躍している。⁽³⁹⁾このことから、出版界と教育界という、時には相反しがちな価値観を持つ両者を、巧みなバランス感覚で繋いでいたことがうかがえる。

おわりに

戦前において、基本的には「少女小説」とは、少女雑誌に掲載されているという媒体に結びついた見方がなされていた。もちろん、少女雑誌の内部でも、様々な差異とカテゴリー付けが生じた。書き手によつて、また編集者によつて、何を「少女小説」とするかということには見解の差異があつた。さらにいえば、現代の「少女小説」研究においても、研究者毎に「少女小説」に対して、様々な見方がなされている。

ここまでの議論は、批評的言説を辿ることで、「少女小説」という用語の定義、また何が「少女小説」とされるのか、考察することを目的とした。

今後の課題としては、「少女小説」の書き手や編集者が、どのような「少女小説」を記すべきと考えていたのか、個別の作品分析と接続し考察することである。

【凡例】

- ・ 年号は、明治、大正、昭和戦前期について、本文中で言及する時は原則的に西暦と併記した。但し注においては、その限りではない。
- ・ 本文は、原則として常用漢字および現代仮名を用いた。ただし、固有名詞についてはその限りではない。

引用に際して、旧字体の漢字、変体仮名及び異体仮名また異体字等は、原則として新字体、常用字体に改めた。ただし、固有名詞の場合はその限りではない。仮名遣い、送り仮名、括弧は、明らかな誤り以外は原文表記を基本とした。振り仮名、強調記号については原文に従わず、適宜省略した。引用文の傍線は、引用者による。

(謝辞) 本研究はJSPS科研費19K00362の助成を受けたものです。

(注)

(1) 無署名「はじめに」岩淵宏子他編『少女小説事典』東京堂出版、

- 二〇一五年、一頁。
- (2) 千野帽子「評論」同前、三四七―三四八頁。
- (3) 本稿の着想のきっかけとなったのは、第四三回日本児童文学学会奨励賞を受賞した目黒強による『児童文学』の成立と課外読み物の時代(和泉書院、二〇一九年)について書評を記したことである(『子ども社会研究』二六号、二〇二〇年六月)。その際は、研究史や同時代資料等について、紙幅の都合で十分に触れることができなかつた。また書評という性質上、当該書籍に議論を集中する必要があつた。このため、そこから啓発され考えるに至つた、「少女小説」に関する考察の一端を、本稿にまとめることにした。
- (4) 菅聡子「少女小説」とは何か」菅聡子編『少女小説』ワンダーランド―明治から平成まで』明治書院、二〇〇八年、六頁。
- (5) 岩淵他前掲書、一頁。
- (6) 大橋崇行『ライトノベルから見た少女／少年小説史』笠間書院、二〇一四年、二〇頁。
- (7) 同前、一九頁。
- (8) 同前、七七頁。
- (9) 同前、一八頁。
- (10) 『乙女の港』の執筆経緯に関しては、次の論文に詳しい。中嶋展子「川端康成『乙女の港』論―「魔法」から「愛」へ・中里恒子草稿との比較から」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第二九卷、二〇一〇年三月(中嶋展子「川端文学の」をさなごころ」と「むすめごころ」―昭和八年を中心に)龍書房、二〇一一年、所収)。
- (11) 目黒強『児童文学』の成立と課外読み物の時代』和泉書院、二〇一九年、三頁。
- (12) 同前、一―二頁。
- (13) 同前、二頁。
- (14) 久米依子『少女小説』の生成―ジェンダー・ポリティクスの世紀』青弓社、二〇一三年、三二頁、一〇七―一〇八頁。
- (15) 高橋重美「夢の主体化―吉屋信子『花物語』初期作の(抒情)を再考する」『日本文学』第五六卷二号、二〇〇七年二月、二六頁。
- (16) 目黒前掲書、二五三、二八五―二九〇頁。
- (17) 同前、二五四―二五六頁。なお、続橋達雄は、一九〇七(明治四〇)年の『少女界』では、すでに「少女文学・少女小説」のことが使われていることから、「少女小説」という角書は読者対象を明示する機能を有したと先駆的に指摘している(続橋達雄「沼田笠峰の『わか草』について」『国学院大学栃木短大紀要』七号、一九七三年(再録 日本文学研究資料刊行会編『児童文学』有精堂出版、一九七七年、一〇五頁)。
- (18) 尾島菊子「不自然を避けること」『處女』第二二卷第二二号、女子文壇社、一九一六年一月、一六五頁。
- (19) 張尾穂草「新しい少年少女文学―所謂少年少女小説と云ふもの及作家」『處女』第二二卷第二二号、女子文壇社、一九一六年一月、一七一頁。
- (20) 北川千代「少女小説の構成と技術」前本一男編『日本現代文章講座』第五卷、厚生閣、一九三四年、一〇四頁。
- (21) さらに厳密に言えば、これらの言葉を使い分けする場合もあり、シュチュエーションによって判断が必要である。
- (22) 雑誌『處女』誌上の特集「新らしき少年少女文学に就いて―(十与名家の感想)」から、引用し示して。特集の趣旨から見て、この三者の見解は「少年少女文学」の創作及び編集に携わる立場からの発言とみることができ(注18、注19も同特集からの引用である)。ここで、星野と尾島は、「雑誌」としか記しておらず、その種別を明言していないが文脈的に見て、少女雑誌と捉えて良いように思われる。なお、執筆者の片書きは、同特集の記載に基づいている。
- (23) 竹貫直人「児童芸術に就て」『處女』第二二卷第二二号、女子文壇社、一九一六年一月、一五九頁。

- (24) 星野水裏「真面目な読者は少い」「處女」第一二巻第一二号、女子文壇社、一九一六年一月、一六六頁。
- (25) 尾島前掲文。
- (26) 無署名「少年少女文学概観」文藝家協会編『文藝年鑑』昭和五年版、新潮社出版、一九三〇年、二〇九頁。
- (27) 同前。
- (28) 無署名「少年少女文学概観」文藝家協会編『文藝年鑑』昭和六年版、新潮社出版、一九三〇年、一六六頁。
- (29) 同前、一六七頁。
- (30) 同前、一六六頁。
- (31) 同前。
- (32) 張尾前掲文。
- (33) この他の重要な要素が、翻訳小説である。たとえば、若松賤子の翻訳小説は、少女小説史の流れの中で重要視されている。菅聡子は、『少女小説』ワンダーランド』で、「現在の〈少女小説〉との関連から注目されるのは、若松賤子による翻訳小説の発表でしょう。(中略)雑誌『女学雑誌』を舞台に、現在でも愛読されている海外少女小説を日本に紹介しました。一八九〇(明治二三)年から連載された『小公子』(バーネット、原題『Little Lord Fauntleroy』)はその代表的な一作です」と説明している(菅前掲書、八頁)。また、久米依子は、『少女小説』の生成』で、『バーネット原作の『小公子』の翻訳で著名だった若松賤子の訳による「セイラ、クルーの話」は、『小公女』の初期系の *Sara Crewe, or What Happened at Miss Minchin's* (一八八八年) を訳出したもので、不遇な少女が才覚と想像力と幸運によって苦境から脱する物語である。女性作家と女性翻訳家による、少女を主人公とした少女のため文学、と呼びうる作だった」と述べる(久米前掲書、五三頁)。また、昭和戦前期の資料を辿ると、村岡花子は「少女文学について」で、「若草物語」が「直ぐ念頭に浮んで来ます」と述べる。英米の小説の場合は、「少年少女文学として
- 標準の読物とされてゐる作品の大部分が、特に少年少女の対象として書かれたと云ふわけでもなく、唯、内容の健全さ、何等かの意味に於ての良き指導性に富んでゐる点を以つて、選ばれる」ということも指摘している(『少女文学について』『書窓』第二巻第四号、日本愛書会書窓発行所、一九三六年一月、三〇九頁)。吉屋信子は、『小さき花々』の中で、「外国の少女小説」を次のように読者に紹介している。「外国の少女小説(少女を主題として書かれた作品)とは、どんなのかしら? みなさまは、それを知り度いとお思ひになる事がございます。昨年の秋の「少女の友」の附録の(リッツル・ウイメン)もオールコット女史の作品で、金髪の緑の眼の四人姉妹の物語で、海の向うのお国の少女の生活を描かれて居りました。あの物語は古くから、たくさんの人に知られて居る有名な作品でしたが、あんなに長くない短編で、そして少女の心持を描いた外国の女流作家、キヤザリン・マンズフィールド女史の一つの作品を、にお話しいたしませう。それは(人形の家)と題する作品でございます(吉屋信子『小さき花々』實業之日本社、一九三六年、一七九頁)。
- (34) 横川寿美子「少女世界」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第二巻、大日本図書、一九九三年、五六二―五六三頁。目黒前掲書、一三一頁。
- (35) 沼田笠峰「反物と小巾類」『少女スケッチ』博文館、一九一〇年、一九三―一九四頁。
- (36) 続橋前掲論文、一〇六頁。
- (37) 続橋が指摘するように、学校教育の精神に背馳しないことが幼少年雑誌の編集姿勢であったが、一九〇〇―一九一〇年代は、「小説」の社会的地位は、規制と教育的利用との間で揺れていた時期であったと目黒は指摘する。それは、「一九一一年に良書の選定を目的の一つとした通俗教育調査委員会が設置され、巖谷小波が委員として任命されるなど、課外読み物を正当化する制度的基盤が整備されつつあった」ことによる(目黒強「メディア有害論か

らみた『少女世界』における女学生像―「少女小説」と「演劇」を中心として―『国際児童文学館紀要』第二十六号、二〇一三年三月、二頁)。

(38) 沼田前掲書、一九四―一九五頁。

(39) 続橋達雄「沼田笠峰」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第二巻、大日本図書、一九九三年、五二―五四頁。ここま
でで挙げた文献の他に、沼田笠峰について詳しく述べたものとして、永井紀代子「誕生・少女たちの解放区―『少女世界』と「少女読書会」(鶴見和子ほか監修、奥田暁子編『女と男の時空』藤原書店、一九九五年)がある。

(受稿 二〇二二年九月三〇日、受理 二〇二三年十一月九日)

